疱瘡神と赤

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

日本において５月は風薫る爽やかな季節である。暑くも寒くもなく、沖縄以外は梅雨もまだ先で、何をするにも心地よい頃と言える。その５月、1980 年５月８日に WHO が地球上からの天然痘根絶を宣言した。1977 年にソマリア人の青年が自然感染して発症、治癒した症例を最後に、研究機関で罹患した１名は別にして、天然痘患者は報告されていない。1796 年イギリス人医師エドワード・ジェンナーによって種痘が発見されるまで、痘瘡（天然痘は通称）は人類史上最も致死率の高い感染症として恐れられてきた。20 世紀だけでも２億人から３億人の命を奪ったと言われるが、その 20 世紀に、紀元前１万年以上前からの長年にわたる闘いに勝利することができたのである。

痘瘡ウィルスが気道感染によってヒトからヒトへ伝播する、などと知るよしもなく、日本では古来、疱瘡神に取り憑かれることによって罹患すると信じられてきた。要するに取り憑かれなければよいのである。痘瘡（以下、疱瘡と称する）にかかると全身に発疹が出て赤くなるためか、疱瘡神は、“赤い”と連想され、赤といえば“猩々”になったらしい。

図１が猩々人形で、疱瘡見舞に贈答されることが多かった。猩々は、古（いにしえ）より中国では全身朱色の長い毛で覆われた猿のような動物で、むろん想像上の動物だが、無類の酒好きと考えられていた。日本では、この猩々が汲めども尽きない酒が湧き出す酒甕を持つ海中に棲む神に変化し、能にも登場する。能の『猩々』では、美しい月夜、孝行息子の前に水中から出現した猩々が、息子の徳を褒めて泉のように尽きることのない酒壺を与えて姿を消す。図１左が孝行息子と推測できるが、機嫌良く壺から柄杓で汲んだ酒を飲んでいるのは右の猩々である。双方とも愛らしい童顔の衣裳人形で、製作年代は確定できないが、江戸時代の京都製の上手物と考えられる。赤い衣裳を身に着けたこのような猩々人形は京都の門跡寺院宝鏡寺にも伝わっている。[(1)] それは、光格天皇（1771 ～ 1840）が疱瘡に罹患した娘の尼君へ贈った見舞の品だが、庶民の間でも安価な張子製の猩々人形（図２）やだるまを贈った。“赤鬼”ではなく福神でもある“猩々”を設定するのがいかにも日本らしい。なぜか。疱瘡は命取りになる危険な病ではあるが、乗り切れば生涯二度とかかる恐れはない。免疫ができれば大丈夫だという共通認識が当時からあったからに他ならない。疱瘡の流行は頻繁で抗えない、それならば撃退するのではなく、穏便にお引き取り願いたいと考えたのである。しからば鬼より神が好ましい。因みに、だるまは“倒れても起き上がる”快復を、張子製は病状が“軽く”済む願いが込められている。

これらの人形が作られた江戸時代、幕府は痘瘡・麻疹・水痘の三疾病に関しては、江戸城への出仕や拝謁の停止を定めた通達を繰り返し出していた。[(2)] それらは『御触書集成』やその他の法令集の「痘瘡麻疹水痘之部」としてまとめられている。最初の通達は延宝８年（1680）で、疱瘡については「病人は見候日より三十五日過候て罷出、御目見仕候」、「看病人は三番湯掛罷出、御目見仕候」と看病者にも規制がある。“三番湯”とは、医師から「もうお風呂に入ってもいいよ」と今日でも言われる平癒宣告にあたる湯掛けの三回目を指す。これら三疾病は、対処を法令に明記した江戸時代の法定伝染病と言える。ただし、この規制は公衆衛生の観点ではなく、将軍、その正嗣、子女の感染を阻止するためだけの意図であった。これは将軍や正嗣が罹患すると「向後は差し控えるに及ばず」と規制解除の御触書が通達されることから明らかで、なんとも残念な次第である。言い換えれば、当時、罹患すれば終生免疫を獲得できると認識されていたのである。

図１（上）　猩々人形 京都 江戸末 高 8.0cm
図２（右）　張子の猩々人形 滋賀 高 13.5cm
左手に盃、右手に柄杓を持つ姿。
〈全て天理参考館蔵品〉

参考図　「疱瘡神祭る図」
寛政 10 年刊『疱瘡心得草』より
疱瘡にかかった子どもの背後に猩々人形をお祀りしている様子が描かれている。

全身真っ赤で赤を好む疱瘡神のために、子どもの玩具は真っ赤に塗り、子どもには取り憑かずに玩具へ関心を逸らせたい、あるいはご機嫌をとって見過ごしてもらいたいと親は切実に考えた。逆に赤を嫌うために赤色で子どもを防御したとする説もある。単に赤が華やかな色であるためではなく、魔除けの意味も込めてそこには厳然と理由があった。「赤物」と呼ばれる玩具がそれである。さらに当時、疱瘡の出来物の色が真っ赤な病人は比較的軽く済むという医学上の定説があり、医学的な知識と疱瘡神が融合して赤色への信奉が強まったとも考える。

ちょうど同じ５月、端午の節句がある。節句の人形として、神田多町の山車の影響もあってか、関東では鍾馗人形が絶大な人気を誇り、幟にも魔除けに霊験あらたかな赤（朱）鍾馗が描かれる。赤鍾馗は特に疱瘡除けに尊ばれた。折角授かった男児を疱瘡神に奪われるわけにはいかないのである。

明治９年に「天然痘予防規則」が施行され、日本で最初の強制予防接種として幼児への種痘が義務づけられた。「小児初生七十日ヨリ満一年迄ノ間ニ必ス種痘スヘシ」と内務省の通達が出ている。明治新政府の卓見であろう。現在日本が保有する細胞培養ワクチンは世界で最も優れていると言われる。奈良時代の天平７年（735）「是歳、年頗不稔、自夏至冬、天下患豌豆瘡、俗曰裳瘡、夭死者多」と疱瘡の流行で多数の死者が出たとの記述が『続日本紀』に見られる。この記事がわが国における確実に疱瘡だとわかる史料の初出である。以来、1300 年の時を経て、子どもの健やかな成長を祝い、猩々の如く平穏に菖蒲酒を酌み交わす爽やかな５月を私たちは迎えることができる。

［注］
1．田中正流「疱瘡と猩々人形に関する一考察―宝鏡寺門跡の事例を中心として―」『人形玩具研究―かたち・あそび―』第 15 号、2004 年。
2．川部裕幸「12 江戸幕府の法定伝染病―疱瘡・麻疹・水痘―」『日本医史学雑誌』第 51 巻、第２号、2005 年。